No 5
70.11.20
共産主義青年同盟
全国委員会

の全国の同志諸君！10・21防衛庁斗争の組織的前進は我が同盟を一層強固な中央集権的組織として全階級戦線に登場せしめる事を現実的に要求している。日比谷野音に結集した3万名の大衆と全国各地における基地解体斗争の中にあって千四百名の全国的結集を克ち取り強固な軍隊行進と戦斗的デモンストレーションが、AIF－叛軍行動委員会によって極めて組織性をもった組織的展開として行なわれ、就中、六本木交差点においては、防衛庁へ向けた組織された戦斗を、機動隊と勢力に粉砕する成果をもって貫したのであった。（なおかかる斗いに対し権力は6名の逮捕と千名の起訴をもって弾圧をしている。ちなみに極めて無政府主義的な戦乱を行ってパクられた40名の革労協＝青ヘルに対して、権力はわずか1名の起訴しか行っていない。交番襲撃のノンセクトは不起訴である。かかる事実からも我々に対する権力の恐怖は明らかであろう。）　我々の圧倒的登場の前に全諸党のみならず膨大な大衆も、60年代階級斗争の地平をのりこえる70年代階級斗争を恒常的武装斗争として実現せんとする我々を一切無視しえず、反帝統一戦線の革命的再編へ向けた胎動が開始された事を暗黙のうちに了解せざるをえなくなっている事は疑いもない事実である。我々はかかる10・21斗争の総括を『戦旗』10/30の号により確認してきたのであるが、それは第一に革命的叛軍斗争の主導的展開についてであった。中核派に示されるようなどの局面における政府の主要な政策に反対する斗いを○○決戦としてカンパニア的に斗ってゆくといった運動論の把握をもってしては如何にレーニン的な全人民的政治斗争を基軸においたとしても帝国主義の攻撃に鋭く対決する環を設定したものとはなりえない。「反戦斗争の主導性は既に侵略反革命戦争に参加し、資本の矛盾を現実的に解決させ、反革命同盟の再編強化を軍事外交路線を基軸に社会再編・権力再編を通じて推進しゆく日帝の全面的政治暴露と権力斗争[illegible]に据え返

とされた時の、帝国主義軍隊解体、革命の正規軍建設、更にソビエト型組織建設といった傾向的武装斗争における主体的指導の対象化しうる斗争へと、即ち、革命的叛軍斗争の主導性へと発展されなければならない。四次防・防衛白書・沖縄前線基地化。米軍基地の自衛隊への移管・ミサイル基地建設、或いは沖縄防衛隊派遣等の自衛隊・帝国主義軍隊の増強・拡大の一般的暴露にとどまらず、日帝の侵略反革命の総路線のうちにかかる政策反対斗争を据え[illegible]実体的基盤へと転化すべく[illegible]へと工作型組織〕創出へ向けた叛軍行動委建設を組織的基盤にしつつ叛軍斗争が斗われてきた事は、とりわけ混迷する諸派の中にあって画期的な事であった。そうであれば個別叛軍斗争の緩慢的展開の延長上に権力斗争を展望する[illegible]的発想、叛軍行動委建設をテコとした叛軍斗争を主軸とした諸個別斗争の統合において、現在共斗会議へ向うことによって、他党派における統一正規軍建設と結合しつつ克服する事がなしうるのである。

[illegible]

とすべく反帝的有効性と軍事的政治的にもちきた。たって事と我々は主張し、恒常的武装斗争の推進と斗争の三つの規定において位置付けてきた。武装蜂起地の真先のみならず、六月安保斗争の不発による先進的大衆の分解は国家権力に進行しており、ノンセクト＝黒ヘルの拡大として現出しているが、この事は[illegible]全共斗組織の崩壊として、権力斗争へ向けた戦略的展望を見出しえないまま結集しているのである。実際全国全共斗議長山本義隆、代行鈴木派等は責任を[illegible]のめかしており、[illegible]明大においてはメロメロになっているのが実情であって、かかる組織的形骸化をKPが必死になって各目上残しているのである。その事はとりもなおさず五派共同声明↓全国全共

斗の根底的組織を要求されるのであり、解決の糸口をも見出せぬまま中核、革労協、全党派は必死に悪あがきを繰り返しているのであるが我が同盟の10・21斗争への歴史的登場によって一挙に事態は進行している(具体的には⑤で詳述)。学園全共斗↓安保全共斗結成にも拘らずその内実が失われていった大衆組織に於る問題を再度権力斗争的内容から把え直すことはとりもなおさず叛軍斗争を主導的に展開する地区共斗(ソヴィエト型組織)へと大衆組織を再編する事である。従って、学園斗争ないしは個別生産点における反合斗争の延長(革労協派に言えばゲリラ戦)の寄せあつめとして形成されてきた地区共斗(例えば堀之内精糖・東村山闘争)の延長上に地区共斗は建設されるのではなく、政党間統一戦線を媒介にした直接的には叛軍斗争を主導とした全人民的政治斗争機関としての地区共斗の先行的建設と、かかる地区共斗における諸斗争の統合を通してソヴィエト型組織として内実を克ち取ってゆくものとして建設されるべきなのである。この事が何ら顧みられず、[illegible]管↓小西叛軍↓72年沖縄ないしは公害斗争とといった具合に次々と諸斗争への乗り移りと散花的な運動を展望している中核派、[illegible]としては最早反帝統一戦線の傘下にはあり得ず争の再度の高揚を待っている革労協でさえ[illegible]我同盟の下に地区共斗の具体的担い手たるべく建設されてきた叛軍行動委の大衆的登場を克ち取る事によって全国叛軍連絡会議を中心として12月全国叛軍連絡会議を媒介に全国各地区叛軍、入管連絡会議の建設をバネにした統一戦線の再編(全国全共斗・全国反戦の解体止揚=全国地区共斗連合)への前進を一歩進めたのであった。

第三点目は軍事の問題であった。実際党の正規軍建設として対象化された軍事の組織化は六本木交差点における戦斗の展開によってその正しさを検証していったのであった。軍事の問題について「全人民武装」一般しか提起しえず自ら正規軍建設を理解しえていない諸派は未だに60年代型大衆的実力斗争を夢みているのであって自己の左翼性の証しとしてしか、特攻隊に対決することができないので。我々は大衆の自然発生的戦斗をまったく否定し革マル派の如く敵対する訳では決してない。しかし革命党派が大衆の自発的戦斗の中に溶解してしまうのであってはなんにもならないのだ。大衆Mの戦術指導部へと堕落してしまった革労協・ML派の如き[illegible]「全人民武装」のスローガンで組織されねばならない。我々は組織的な戦術では[illegible]あったが10・21斗争を全面的に貫徹した点/を再度確認しよう。しかしながら[illegible]力斗争であること[illegible]の確立、[illegible]解決さるべき課題が山積している事も合わせて総括せねばならない。

第四点目 我々は[illegible]ことによって[illegible]情況派を集会に一歩も近づけず[illegible]叛旗者以上の[illegible]の解体と消耗現象を生み出している。[illegible]は既に[illegible]として中堅活動家は消耗しており、昨日、神津と一年活動家が[illegible]といった有様であり、叛旗の我々に対する敗北によって叛旗一切の共[illegible]会には[illegible]、むしろ情況派との矛盾が拡大している有様で、すでに独自の大衆斗争への[illegible]ている事からも[illegible]しか組織しえない[illegible]であり、[illegible]大衆的に[illegible]。我々は中[illegible]における[illegible]とした三里塚地区反対同盟の斗いを通して叛旗派をすでに[illegible]ことを明らかにしつつ、[illegible]しばらく潜伏していたので[illegible]大衆を拠点にして再度大衆斗争へ[illegible]以下的な[illegible]、まか10・21当日において我々の[illegible]面であり[illegible]自らに[illegible]し一連の[illegible]

[illegible]

②以上の10・21総括をふまえて、10・21以降の組織的展開を我々は次に見ていかねばならない。まずはじめに10・21直後某所に於いて開かれたキム全国委員会の報告である。実践的方針より10・21総括の基本的視点の提起のあと、主要に、関西地区より戦旗に主張された全人民武装と、ソビエト型組織の位置付けについて討論が行なわれた。討論は[illegible]に提起された「帝国主義軍隊解体、正規軍建設、全人民武装」を戦略的環とする見解についてである。小西叛軍斗争の過程での諸党派と我々の決定的対立点の一つとして「正規軍建設」か「全人民武装」かとして明らかにされてきた。即ち60年代における大衆的実力斗争の延長に革命を考える他派においては、軍事の必然化が何ら主体的な軍事をはりも党的な[illegible]の確立として対象化されず全人民武装の必然性を大衆的に説くのみであった。それも全人民武装が貫徹されるのが実は志願制による民兵と正規軍の政治的死滅の中でプロレタリア世界国家になって始めて実現される種類のものといった原則的な内容すらふまえられておらず、人民総武装があたかも現実の階級斗争に実現できるかの如き、或いは人民の武装一般でもって帝国主義軍隊を解体しうるかの如き幻想に対し鋭い党派斗争が展開されてきたのである。かかる問題に対する全国組織統一の弱さの故に統一戦線部における[illegible]性を生み出してきたのであり、組織的にふまえて基本的意志統一を克ち取った意味でここに明らかにしたい。次に地区共斗ソビエト型組織建設について論争が行なわれた。[illegible]統一戦線・最高形態としてのソビエトは[illegible]規定に疑問が提出されソビエトは組織的の一環であり、樹立される権力の本質規定はソビエト独裁ではなく党の独裁であると主張された[illegible]であるがそれは二重の誤りを有している[illegible]らかにされねばならない。誤差はそこで統一戦線の意味を政党間統一戦線と階級間統一戦線をロシアにおける農民―SL、小ブル―メンシェビキ、プロ―ボルシェビキになぞらえて二重写しにし、現在の反帝統一戦線は学生にしか依拠しえていないことを根拠に、かかる政党間統一戦線を基盤にする限りソビエトは階級間統一戦線にならず社会党との統一戦線でない限り[illegible]統一戦線の最高形態としてのソビエトは形成されないと主張するのである。しかしこの考えの誤りはソビエトの本質規定としての諸階層をプロレタリアートの階級利害の下に包摂してゆくというプロレタリア統一戦線としての意味を何ら理解しえず、実体的な階層と諸政党との諸関係の機械主義的認識に基く政党間統一戦線の把握であって、あたかも地区共斗の説明概念であるソビエト型組織がソビエトの実体をなさないながら体現するかの如く考え[illegible]ではなく、一[illegible]かなく階級間統一戦線にならない重層的構造も[illegible]た言葉になってしまうのである。しかも諸階層の代表政党間による統一戦線が出来[illegible]ソビエトは党の一部と[illegible]主張するとは全く誤りであり、党派間の組織もソビエト内には諸党派が参加するが、ソビエト自体の指導部は政府[illegible]実力担う全機関という意味において捉えり[illegible]のである。

10・21以降に[illegible]斗争、11・1自衛隊パレード粉砕斗争、沖縄[illegible]加盟[illegible]粉砕斗争が斗われた事であるが、我々は10・21の成果を打ち固めるべく地区叛軍行動委の組織的確立と運動としての実体化を目指してきた。例えば[illegible]地区においては西部[illegible]叛軍を中部地区叛軍として[illegible]パンフレット[illegible]のの、そのような[illegible]的体制の[illegible]が全部[illegible]を持って[illegible]ない[illegible]。[illegible]沖縄斗争という組織形態で斗った事に於[illegible]沖縄返還協定が実は昨秋の日米共同声明に基く日米両帝国主義

③次に我々は八派内部の組織的動向を確認しておかねばならない。

中核は十一月決戦の総括をめぐって下部からのつきあげを官僚的に統制してきたわけだが、いわゆる左派＝清水・水谷ラインが右派＝岸本・北小路ラインに敗北することによって人質「決戦」でなんとか全国全共斗・反戦をイジせんとしているわけだが、両者に根本的な路線的差異があるわけでもなく沖縄斗争論のなしくずし的修正をしつつ人質決戦→叛軍への乗り移りを前進しつつある。例えば沖縄斗争において「日帝の沖縄返還政策粉砕」なるスローガンを下かげつつも、それはかっての岩田世界資本主義論に基く日米運命共同体論なる帝国主義の政治、軍事的世界編成による経済行為のきりすてからみちびかれる自動崩壊論＝全般的危機論からのレーニン帝国主義論への教条主義的のり移りを行うの飛躍をなしえないまま作った事の反映であり、沖縄奪還＝沖縄返還政策粉砕といった日帝純化主義＝一国主義へと転落しているのである。そこにおいては同時に祖国復帰＝現状変革などとブルジョアジーに歪作的に集約されている自然発生性を全面展開し、沖縄奪還へ永久核基地化反対、本土復帰、基地撤去しという市民的イシキへ民族＝国民イシキの枠内で高めて行くとされているのであり基本的な路線的くいちがっていないのである。このような内部な論しか導きだしえない中核派の党内斗争は本多の保釈金奪還にひかえて一大動員を迎えようとしている為、裁判闘争の傾が組分け的浮流 [illegible] 題を通じた学生戦線の弱体化は首都において顕チョであり、十一、二二斗争をも人質斗争のけへとねじまげようと必死であり、全国動員をもって何とか体裁をつけようとしているのが実情である。従がって十二、九全国叛軍結成大会をも単なる連絡センターとして小西裁判斗争主導権をからとる組織としてしかイチ付けておらずその反動的性格は明らかになっている。

ML派は明大学生解放戦線の自己批判に示めされるとおり十一月決戦しなるものの敗北が決定的分解をうみだしており、赫派の八派からの [illegible] るしと叛本派の八派にとどまるしに大きく分かれ赫派は八派会議には参加していない。しかも工部における果てしない論争は東大列品闘組の反発をうみだし、大衆斗争にはわずか五の名という有様であり、理論斗争の内容は一切大衆の方に明らかにされず統一戦線に対するハカイ行為主義道徳主義的自己批判しか提起しえず毛沢東主義への誤判などは全く省みられないのである。

革共同は反戦では一定の伸張をみせているものの指導部の無政府主義的組織をもってしては、一般斗争を [illegible] 的にできなくなってしまっている [illegible] の立場に与る我々への対する [illegible]、現在では我々とのボス交にすぎ [illegible] Pに加担していくという官僚的政治 [illegible] [illegible] ト運動しを傾かして [illegible] しているのであって、いかなる在民的政治を粉砕して我々は [illegible] てかねばならない。内部に旦を中心とした [illegible] がえる不死鳥・タルーアミ成え、不断に下部から小市民主義をうみだしレーつそれも無媒介的に [illegible] していくという、の理論的政治的弱点を [illegible] につつ同時に四月斗争の具体的運動の後退の下に彼らをひきこでゆく必要があるだろう。

ブントは十一、一五全国動員にかかわらず四百であり、我々の半分の動員力しかもっていない。従来の戦術的帝国主義世界という世界認識の弱にもかかわらず、[illegible] として純化主義ではなく [illegible]、一方で日学同と我々との斗争で一定の決着をつけているものの、基本的には [illegible] のいない所で伸びているのであって、例えば一・二〇斉闘においてブントが登場するやパーと崩れ逃げ出す有様である。叛軍斗争においても単に個別斗争としてしか捉えず、地区共斗創 [illegible] 的広報 [illegible] の基盤的関係を作る拡 [illegible] らないのを [illegible] ってもセクトにしろ [illegible] 例にしろ地区 [illegible] 斗争を口では云々しつつも実は [illegible] 斗の統一的 [illegible] のレベルでしか語られていないのであって、[illegible] は地区 [illegible] でしかありえない―かといった程度の理由なのであり、いかに [illegible] るかを問題とせずしていかに形成してゆくのかという運営的構造を何ら提出しえないのである。

従がって他派においては、叛軍にとりくみはしているものの、かかる叛軍斗争は例えば小西 [illegible]、各基地総会の斗いのように個別的に捉えられ、人民的政治斗争の主軸的運動として、日帝の治 [illegible] のバクロ、権力斗争論に規定された斗いとして措定されず、現在ある救援連絡センターと同 [illegible] 連絡機関として全国叛軍もバラバラしているのだ。かかる時点において、反帝統一戦線の再ヘンは [illegible]

易に進みえないのは当り前であって、この意味に[illegible]
ト、軍務家的戦争を永に続[illegible]
らウトくカオルクとそれはい状況が生まれたのであ[illegible]
な、選手的には国民共和、国家に[illegible]
けもこーの状態を促進させ[illegible]
すへ所謂[illegible]の効果は鋭い[illegible]
ようたし、まずもって第一の[illegible]
的運動の具体的経済的なものな[illegible]
つて我々の統一戦線に対する[illegible]
ざる所は何かはない。
⊖ 以上のような困難な過去の[illegible]
日本軍事連絡会議（Ｉ［illegible］）[illegible]
いる。もともと[illegible]
発した小国家連合[illegible]
下国三国の軍隊内において[illegible]
二、赤旗の創立へ向けて[illegible]
この動きに戦争に発展したのであって[illegible]
ことするプロレタリアートの指導で自己[illegible]
れなかった歴史に驚いた政府が当面は[illegible]
は帰ってきて国内情勢を[illegible]
[illegible]

[illegible]侵略[illegible]

量を持ち[illegible]と、攻撃に[illegible]